

# 韓国における学びの共同体と学校改革

韓国学びの共同体研究会  
代表 孫于正(SON, WOOJUNG)

# 韓国における学びの共同体の実践現況

- 現在、韓国の学校改革のための一番強力な理論
- 実践学校＝約300校（中学校が9割、30校は地域の拠点校）
- 会員数＝約3600人、地域研究会＝24個（月1回は研究会開催）
- 全国地域体表ワークショップ＝年4回（124人/25人コンサルタント）
- 全国大会＝年1回（第5回2014年8月14日予定）
  - －佐藤先生の基調講演、映像による授業事例研究(25個) と代表授業の分析



# 展開、順序ではなかった！

- **第1期(2000年~2005年) 教育庁の研究モデル学校期**
  - 報告書の作成と提出で終了、一般学校への普及は失敗
- **第2期(2006年~2008年) 代案学校期**
  - 代案学校の特殊性に注目、普通の公立学校への導入は失敗
- **第3期(2009年~2012年) 革新学校期**
  - 進歩的教育監(17人の中で5人)の教育政策に基づいた革新学校(特別予算)を中心に**学校レベル**で導入、実践中
  - 韓国において授業を中核とする最初の学校改革
- **第4期(2013年~現在) 普通の一般学校への普及**
  - 進歩的教育監の地域ばかりでなく、全国の各地で‘学びの共同体’を標榜する実践学校の登場
  - 進歩や保守を問わず教師レベルで授業研究への関心が高くなる
  - 元、革新学校の教師の移動による一般化

# 韓国における学びの共同体の成功要因

- **哲学＝”一人の子も残らず学ぶ権利を保障する“**(佐藤学)
  - －教師：授業崩壊、習熟度別授業、子どもの自殺や校内暴力などによってバーンアウト状態
  - －学力向上＝教育目的に対する反感
  - －教育の本質を取り戻す教師(特に、全教組)の熱情
- **活動システム＝教室、学校運営、親や地域社会**
  - －1990年代に登場した‘開かれた教育 (open education)’の失敗経験＝活動システムの不在
  - －教師を研究対象とする授業評価(＝教師評価)に対する反対
- **佐藤学先生の理論や著書**
  - －<授業が変わる学校が変わる>2006年から大型書店のステディセラー
  - －<学校の挑戦><教師たちの挑戦><教育改革をデザインする>





# 1. 学校文化の変化

- 教育の中核：生活指導 → 授業
- 教師文化：‘親睦’ → ‘同僚性’（専門家教師）
- 校内研修：講演 → 授業公開＋授業研究会＝校内研修(指導案の簡素化)
- 授業公開の焦点：教師評価 → 子どもの学びの様相
- 学校運営：教務行政 → 授業事例研究センターの校内研修（定例化）  
 ー教務行政の簡素化（業務担当者の配置）
- 親や地域社会：監督者 → 協力者

## <指導案1枚>

인천석남중학교 (3)학년 (3)반		수업자	김 찬
교과	과 학	단원명	8. 생식과 발생
		차시	3/6
		교과 종류	6.8년
주제	체세포분열의 과정은 어떻게 될까?		
단원 구성	1차시 : 생물은 왜 세포 분열을 하는가?		
	2차시 : 남자와 여자의 염색체는 뭐 같을까?		
	3차시 : 세포는 어떻게 나누어질까?		
	4차시 : 체세포 분열 관찰 실험		
	5차시 : 아버지와 나의 염색체 수는 같을까?		
수업 흐름	1단계(5분) : 세포분열 후의 모습을 예측해서 그려본다.(개인활동)		
	2단계(20분) : 체세포 분열 단계의 모식도를 주고 순서와 특징을 찾아본다.(모둠)		
	3단계(20분) : 실제의 체세포 분열 모습을 주고 단계를 찾아본 후 분열의 의미를 알아보고 식물세포와 동물세포의 세포질 분열의 모습의 특징을 비교해 본다.(모둠)		
수업자 수업권	‘생각대로 살지 않으면, 사는 대로 생각하게 된다.’ 경험 힘들었던 18년간의 사회생활을 했지만 6년여의 교직생활 또한 결코 만만치 않았습니다. 제가 학에서 보던 학교의 모습과 실제의 학교는 상당히 많이 달라 이전 어는데 하며 살아오다가 작년 1월 새로운 학교를 만났고, 그해 여름에는 행운의공동체와 만나게 되었습니다. 이를 통해 우리 중교육의 문제점이 무엇이고, 어떤 것이 교사들을 힘들게 하는 것인지를 알게 되었습니다. 결국은 교육목표와 교육현실이 너무 다른 중교육의 정상화가 절망적이더군요. 작년 1월에 연수중 ‘내게 수업이 무엇이나’라는 강점에서 저는 수업이 ‘교과’이 아니고 ‘학생’이라고. 우리 아이는 사실 다른 아이들에게도 친구나 다름없는 아이로		



## 2. 教室の変化

### □ 机：コの字と4人グループ学習

一机の配置に意味のあるのではなく“どの子も一人にしない”と哲学の実現





□ ‘学び’中心の授業づくり＝活動、協同、表現的な授業の実現

－活動：教科書中心 → カリキュラム中心の子どもの活動デザイン

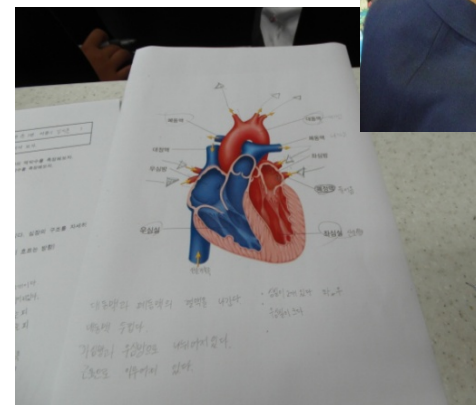
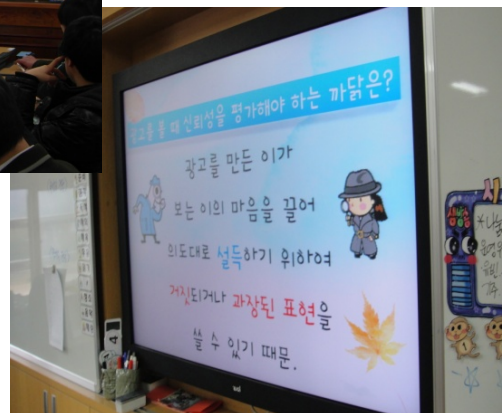
－協同：協力学習(4人で一つにまとめ) → 学びあう関係

－表現：正解の確認 → 学んだことの交流や省察



<見る授業>

<学びあう授業>



# 3. 親や地域社会との関係

- 親への授業公開
- 保護者アカデミーの運営：保護者の教養教育
- 保護者や地域住民を補助教師として学習参加させること
- テーマ学習への参加、体験学習や見学などへの同伴
- 父親会の活性化
- 地域住民の学習参加





# 成果と課題

## □ 成果

- －教師たちの授業や教職に対する満足度向上
- －教師のカリキュラム再構成や授業の専門性の向上（マニュアルから脱皮）
- －子どもたちの問題行動（校内暴力、いじめなど）の急減
- －子どもの授業満足度向上（学力向上）
- －保護者の学校への信頼度向上

## □ 課題

- －小学校の参加（実践学校の9割＝中学校 → 高校の変化を導く）
- －校内研修の支援できるスーパーバイザの養成
- －学びの質を高めること（教材研究）
- 校長や教頭を教育専門家として参加させること
- －教員養成大学や教員研修機関や実習生教育との連携
- 教科教育における親や地域住民の‘学習参加’の実現